

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小・中・高等学校学習指導要領における古典観の検討
Author(s)	青山, 之典
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 10 - 14
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054794
Right	
Relation	



小・中・高等学校学習指導要領における古典観の検討

福岡教育大学 青山 之典

キーワード：古典観、学習指導要領

1、問題意識

渡辺春美（2016）は高校生が古典の学習に消極的で否定的であることを指摘し、古典の活性化が今日の切実な課題であると指摘する。さらに、渡辺（2016）は「戦後古典教育は、規範としての古典観に基づく授業者中心の学習指導から「関係概念」としての「古典」観に基づく学習者中心の学習指導の成立を追究して展開した」（p. 24）と指摘する。

渡辺（2016）のいう関係概念としての古典観とは、古典が「学習者の積極的、主体的な読みによって個々の中に立ち上がり、学習者の生活と精神を相対化し、認識、感動、示唆、指針、反省を新たにさせ、今日を生きる力となる」（p. 8）という見方である。このような立場に立って古典教育が行われる時、荒木繁（1953）の報告中の学習者のように、生徒は古典の学習に積極的な意味を見出すのではなかろうか。

ただ、渡辺（2016）が指摘するように受験指導との関係で、授業の中で関係概念としての古典観が重視されていない実態も散見される。この問題はどのように克服すべきであろうか。

2、学習指導要領における古典観の検討

—義務教育段階の場合—

(1) 小学校学習指導要領の検討

小学校学習指導要領解説国語編によると、古典に関する学習は「伝統的な言語文化」に位置づけられている。「触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気付き、理解を深めること」（p. 25）に重点が置かれている。具体的には、言葉の響きやリズムに親しむこと（3～6年）、言葉の豊かさに気付くこと（1・2年）、ことわざや慣用句、故事成語などの長く使われてきた言葉を知り、使うこと（3・4年）、作品に表れている昔の人のものの見方や感じ方を知ること（5・6年）が示されている（pp. 25-26）。

また、「言葉の由来や変化」という項目が伝統的

な言語文化に関連して位置づけられており、「時間や場所による言葉の変化、言葉の由来に関すること」が示されている（p. 25）。

さらに各学年の指導事項には、次のような言語活動が示されている。関係するものを一部抜粋、要約して示す（p. 26）。

【1・2年】

伝統的な言語文化

- ・昔話、神話・伝承などの読み聞かせを聞く
- ・長く親しまれている言葉遊び

言葉の由来や変化

（該当無し）

【3・4年】

伝統的な言語文化

- ・易しい文語調の短歌や俳句の音読や暗唱
- ・長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使う。

言葉の由来や変化

（該当無し）

【5・6年】

伝統的な言語文化

- ・親しみやすい古文の音読
- ・古典についての解説などを読み、作品の内容の大体を知ることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知る。

言葉の由来や変化

- ・語句の由来に関心をもつ。
- ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付く。

昔話、神話・伝承や言葉遊びから入り、易しい作品の暗唱などを通して親しみ、古典についての解説などを参考にして内容を理解し、昔に思いを馳せるといった活動の流れが窺える。言葉の由来や変化を手がかりにして、子どもの言葉使用の実態と関係づけて昔の言葉に目を向けさせようとしていることも感じられる。これらのことから、小学校では古典に触れること自体に重点が置かれ、音読などの言語活

動を通して親しみ、楽しむことで、古典を学習者の身近な存在にしようとしているように感じられる。また、言葉の変化や由来といった項目を立てて、今を生きる私たちの言葉との関係に焦点をあて、古典と今とをつなぐものの見方を育てようとしていることも感じられる。

(2) 中学校学習指導要領の検討

中学校学習指導要領解説国語編によると小学校と同様に古典教育は「伝統的な言語文化」に位置づけられ、小学校に引き続いて親しむことを重視している。特に中学校では「表現を味わったり、自らの表現に生かしたり」することに重点を置いている。具体的には、古典には様々な種類があることを知ること（中 1）、古典に表れたものの見方や考え方を知ること（中 2）、長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと（中 3）が示されている（p. 24）。

また、小学校と同様に「言葉の由来や変化」という項目が設定され、「時代による言葉の違いや、地域や世代による言葉の違い」に焦点を当てている（p. 24）。具体的には、中学 3 年に時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いについて理解することが位置づけられている（p. 26）。

さらに各学年の指導事項には次のような言語活動が示されている。関係するものを一部抜粋、要約して示す（pp. 25-26）。

【1 年】

伝統的な言語文化

- ・音読に必要な文語のきまり、訓読の仕方を知る。
- ・古文や漢文の音読
- ・古典には様々な種類の作品があることを知る。

言葉の由来や変化

（該当無し）

【2 年】

伝統的な言語文化

- ・作品の特徴を生かした朗読
- ・現代語訳や語注を手がかりにした作品の読み

言葉の由来や変化

（該当無し）

【3 年】

伝統的な言語文化

- ・歴史的背景などに注意して古典を読む
- ・長く親しまれている言葉や古典の一節を引用し、

使う。

言葉の由来や変化

- ・時間の経過による言葉の変化、世代による言葉の違いを理解する。

音読に必要な古典文法学習など、現代語訳のための知識、能力を育成しようとしている面は小学校とは異なっている。しかし、手がかりになる現代語訳や語注を積極的に生かして、作品内容の理解を進めさせ、古典に表れたものの見方や考え方を理解させようとしているところはよく似ている。時間の経過による言葉の変化と世代による言葉の違いを理解するという点も、両者の間に関係を見出させ、学習者に古典との関係性を自覚させることが目指されているように感じる。

(3) 義務教育段階における古典観の検討まとめ

ここまで義務教育段階の学習指導要領における古典観について検討してきた。明らかになったことは、言葉遊びや音声化を通して古典に親しむこと、古典作品の現代語訳の基礎を知ること、長く使われてきた言葉の意味、由来などを知り、自らの表現に使うこと、というように古典に触れ、古典を身近な存在にしていけることである。このことは渡辺（2016）のいう関係概念の基礎となる可能性を秘めているが、逆に、古典の現代語訳の能力を高めることに終始する学習の基礎となってしまう可能性もある。このような実態をもつ義務教育段階を終えたとき、学習者は毎日生きる上で、生活と精神を相対化し、新たな示唆を得て、生きる力を与えてくれるものとして古典を位置づけるようになるだろうか。

確かに、学習指導要領に示された古典作品から窺える昔の人のものの見方や考え方には可能性がある。それは学習者の積極的、主体的な読みによって、古典の世界を学習者の内面に立ち上げ、今を生きる「私」自身を相対化できる可能性があるからである。しかし、それは古典作品に内在するものの見方を対象化し、読者自らが認識を相対化できる能力が身についていなければ難しいだろう。このことは、古典作品を易しくして触れ、親しむだけでは、渡辺（2016）のいうような関係を作り上げることは難しいということを示している。渡辺（2016）のいうような古典の読みを授業において繰り返し実践することによってこそ、少しずつ可能になってくるものと考えられる。そのような目標や内容が小・中学校学習指導要

領に盛り込まれることで、教科書も授業も変わってくるのではないかと考える。

3、学習指導要領における古典観の検討

—高等学校の場合—

(1) 高等学校学習指導要領の検討

前節で明らかにした義務教育段階における現状は、高等学校においては克服されているのであろうか。

高等学校学習指導要領解説国語編には中央教育審議会答申を引用し次の部分が明示されている(p.8)。

古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

この問題意識は渡辺(2016)に見られるものとよく似ている。これを克服するために、現行学習指導要領では、「我が国の歴史の中で創造され、上代から近現代まで継承されてきたものであり、(中略)関わりの深い我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力を育成する科目「言語文化」(中略)を、全ての高校生が履修する共通必修科目として設定」(p.9)している。

その他、選択科目として「古典探究」が設定されたが、発展的なものとして設定されたということを目指しておきたい。本稿では「言語文化」に焦点をあて、「古典探究」と比較しながら検討を進める。

(2) 「言語文化」の検討

「言語文化」の目標は次のとおりである(p.26)。

[知識及び技能]

- ・生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

[思考力、判断力、表現力等]

- ・論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

[学びに向かう力、人間性等]

- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯

にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

「言語文化」であるが、実は[知識及び技能]の目標は選択科目「文学国語」と同じである。ちなみに「古典探究」では「我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深める」となっており、「言語文化」が古典のみを対象にしたものではないことを示唆している。

また、[思考力、判断力、表現力等]の目標は共通必修科目「現代の国語」と同じである。そして「古典探究」の[思考力、判断力、表現力等]の目標は次のとおりである(p.27)。

- ・論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、**古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方**との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。(太字ゴシックは筆者による。)

太字ゴシックの部分が「言語文化」とは異なる。この部分は「言語文化」では「他者」となっている。つまり、「言語文化」では広く他者との関わりの中で、というところが、「古典探究」では「古典などをとおした先人のものの見方、感じ方、考え方」にしばり込まれているということである。

そして、[学びに向かう力、人間性等]の目標は「現代の国語」と同じである。「古典探究」は「我が国の言語文化の担い手としての自覚を」の後が「深め」となっており、発展的であったり、専門的であったりすることが求められているようである。

これらの検討から明らかなのは、「言語文化」は「古典探究」ほどに古典に特化したものではないということである。このことを、現行の「言語文化」教科書からも確かめておきたい。

(3) 「言語文化」教科書の検討

周知のことであるが、教科書は学習指導要領をもとに検定を受けて合格したものであり、学習指導要領を具体化したものである。そこで、教科書には学習指導要領の内実が顕在化していると考えて、「言語文化」教科書において古典がどのように位置づけられているかを確かめておきたい。なお、検討するのは表1のとおり2021年検定済の「言語文化」教科書全17点である。また、「言語文化」という科目は

新設されたものであり、教科書も過渡期にあることを追記しておきたい。

表1 2021年検定済「言語文化」教科書

冊	発行所	書名	分類
1	東京書籍	新編 言語文化	A-1
2	東京書籍	精選 言語文化	A-1
3	三省堂	精選 言語文化	A-2
4	三省堂	新 言語文化	B
5	大修館書店	言語文化	A-1
6	大修館書店	新編 言語文化	A-1
7	数研出版	言語文化	A-2
8	数研出版	高等学校 言語文化	A-2
9	数研出版	新編 言語文化	A-1
10	文英堂	言語文化	B
11	明治書院	精選 言語文化	A-2
12	筑摩書房	言語文化	A-2
13	第一学習社	高等学校 言語文化	A-3
14	第一学習社	高等学校 精選言語文化	A-1
15	第一学習社	高等学校 標準言語文化	A-1
16	第一学習社	高等学校 新編言語文化	A-1
17	桐原書店	探求 言語文化	A-2

教科書の構成から大まかに分類し、いくつかを取り上げて検討しておきたい。17点の「言語文化」教科書の構成は大きく二つに分類できる。

- A: 近現代文、古文、漢文というそれぞれのまとまりをもっているもの。
 B: いくつかのテーマを決めて、近現代文、古文、漢文を混在させて配置しているもの。

また、Aは配列の仕方によって、さらに次のように下位分類できる。

- A-1: 近現代文、古文、漢文の順に配列
 A-2: 古文、漢文、近現代文の順に配列
 A-3: 日本文学(古文、近現代文)、漢文の順に配列

それぞれの教科書は表1の右端に示したとおりに分類できる。また個々の教科書には、様々な工夫が窺える。例えばA-1の場合、「歌物語」、「随筆」といったジャンルによって下位分類したもの、「現代にも生きる教え」、「先人を思う旅」といったテーマを示して下位分類したものがある。また、Bの場合には、テーマを示して古文、漢文、近現代文をいくつかにまとめている。例えば4番の教科書は、「沙石集」(児の飴食ひたること)無住、「説苑」

(景公之馬)劉向、「羅生門」芥川龍之介をまとめて「物語は無限に展開する」というテーマを示している。様々な構成の仕方があるが、それぞれに学習指導要領「言語文化」の目標を検討し、その趣旨を踏まえて工夫が凝らされたものであり、教科書検定に合格したものである。

〔知識及び技能〕の目標については、「社会生活」と「我が国の言語文化」というキーワードをカバーできるように様々なジャンルからバランスよく配置することで具体化したようである。また、〔思考力、判断力、表現力等〕の目標については、論理的に考える力、深く共感したり豊かに想像したりする力を発揮し、他者との関わりの中で学ぶことを促すテーマ、ジャンルを示すことで具体化を図ったようである。〔学びに向かう力、人間性等〕の目標については、例えば12番の教科書のように、「人間の普遍的な姿」というテーマで竹取物語と伊勢物語を配置し、古典文法についてコラム的に載せ、レッスン「『竹取物語』と『かぐやひめ』を比較しよう」、「『歌物語』を作ろう」を設定している。レッスンはテーマに沿って総合的な学習を促すとともに、〔学びに向かう力、人間性等〕に関わる学習を促すだろう。特に「歌物語」の方は、教科書の中から好きな詩歌の一つを選んで、自分なりの「歌物語」を作るように促している。「伊勢物語」を学習した後、「歌物語」に焦点をあてて作者の立場に立つという活動は、「伊勢物語」の作者を浮き彫りにし、読者としての「私」を対象化することにもつながる。これは渡辺(2016)が求めた方向性に近いものではないかと考える。

ただ、多くの場合はそれぞれの単元の終わりに総合的な作品解釈のための言語活動が配置されているに留まっており、学習者を読者として育てる先のような事例は少ない。古典作品の現代語訳と解釈の能力形成が重要視されていることも事実であり、そのこと自体に問題があるわけでもないが、高等学校学習指導要領において、渡辺(2016)の指摘する問題の克服はまだ途上にあるといえるだろう。

4、総合考察

高等学校学習指導要領と高等学校「言語文化」教科書の検討から考えられることは、渡辺(2016)のいう関係概念を意識した古典教育が目指されているようだが、それは一部に留まり、全体として関係

概念を中心に据えた古典教育が志向され、実現しているとはいえないということである。また、義務教育段階においては親しむことが重視されており、そのこと自体に問題はないが、主体的に古典に関わり、自らの生活などについて見つめ直す機会にまでは高められていない状況がある。これらの状況をどのように克服すればよいだろうか。

渡辺（2016）には、渡辺自身による授業実践報告がある（pp. 233-248）。「伊勢物語」（初冠）を中心教材とした授業である。事前に実態調査を行うとともに、事前課題（「伊勢物語」に関する文章、以前に行った「伊勢物語」の授業で書かせた生徒の読後感想文）を渡し「伊勢物語」に対する興味関心を高め、授業に積極的、主体的に参加させようと努力している。授業においても、興味関心を高めることを第一に考え、全体にわたる注釈や通釈は必要なものに止め、できるだけ行わずに内容を理解させるよう努力している。また、「伊勢物語」のテーマである「みやび」の意味把握、物語の読みの方法を理解させる授業を試み、課外に個人のスタイルに応じた、感想・日記・物語の口語による改作、続き物語の創作などの課題を選択して行わせている。

この授業を終えた生徒の感想文も載せられているが、その中に「私がいちばん心に残ったことは、男の人と女の人の気持ちの伝え方です。自分の服を切り、今の自分の気持ちを歌で伝えるなんて、今の人には出来ません。」（p. 243）というものがあつた。すべての生徒がこのように書いたわけではないのだが、この生徒は関係概念としての古典観によって「伊勢物語」に向き合い、自らを対象化することができている。渡辺自身は、すべての生徒がそのようにできたわけではないと内省的に捉えているが、本実践における渡辺の努力が、このような学習者を生み出しているものと考えられる。そして、ここに現状の課題を克服するための重要な示唆があると考えられる。

渡辺は「伊勢物語」それだけを対象としなかった。関係する文章（本実践では、①岩波書店編集部編『日本古典のすすめ』1999年6月 岩波ジュニア新書抄出、②俵万智『恋する伊勢物語』（1995年9月 ちくま文庫）「あとがき」より抄出、③YC「恋の見本帳」（田辺聖子『文車日記—私の古典散歩—』1978年7月 新潮文庫）、④高校生の『伊勢物語』学習に関する感想文（二編））を事前課題として読ませ、

『伊勢物語』に対する興味関心を高めるとともに、読みの基盤を形成させている。このことはとても重要である。特に、先行する学習者の感想文を教材として提示したことで学習の方向性をも形成されたことが予想され、重要な手立てであったと考える。このような手立てがなければ、注釈や通釈を必要最小限にすることはできなかったであろうし、生徒の主体的な学習も成立しなかったであろう。小・中学校における古典学習においても、対象となる古典作品のみに親しむレベルに留まらず、実態に応じた複数教材を用意した授業が求められる。

表1の12番の教科書の例のように、渡辺の考え方と同様の発想に立つものもある。このような教材が小学校から高等学校の教科書に用意され、授業も関係概念を中心に据えて行われるように、学習指導要領のさらなる改訂が求められる。

引用参考文献

- 荒木繁（1953）「民族教育としての古典教育—万葉集を中心として—」1953年11月、『日本文学』vol.2 No.9、日本文学協会編
- 文部科学省（2017a）『小学校学習指導要領解説国語編』2017年7月、文部科学省
- 文部科学省（2017b）『中学校学習指導要領解説国語編』2017年7月、文部科学省
- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説国語編』2018年7月、文部科学省
- 渡辺春美（2016）『古典教育の創造—授業の活性化を求めて—』2016年3月20日、溪水社

なお、「言語文化」教科書については、表1に示したとおりである。